

日本的現實主義と「もののあはれ」

田中，晃

<https://doi.org/10.15017/2557027>

出版情報：文學研究. 23, pp.133-136, 1938-06-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



日本的現實主義と「もののあはれ」

田 中 晃

日本思想には種々の特質が数へられるであらうが、就中本質的なものとして現實主義といふことが挙げられてゐる。けれども一口に現實主義と呼ばれるものにも、その

「もののあはれ」が、現實主義の地盤に立つといふことは、一見して不可思議ではあつても、日本人に於ては無理もなく融合されてゐるのである。

ニュアンスには微妙な差異があると思ふ。いかなる場合にも、人は概念の豫想を抱いて事實を托けてはならないが、日本思想の研究の場合には特にこの警戒が必要である。蓋し本來概念的に組織されてゐない日本思想は、概念的には相反する性質のものを一元的に融合してゐる場合が多いからである。私がいま極めて概観的な豫想を抱いてゐる「もののあはれ」も、實は日本の現實主義の地盤に於て成育した思想ではないかと思ふ。あの中世國文學の美的理念であり、廣く中世人生觀の根柢をなした「も

さて日本思想が現實主義的であるといふことは、たとへばイスラヘルの民族のやうに外に絶對的超越神を立てぬことに於て、また印度の民族のやうに内に絶對無の自覺に到達しないことに於て、その本質的意義をもつであらう。吾々の遠い祖先が外來文化の影響を蒙らなかつた時代には、外に超越的絶對神を知らぬが故に、肉體の罪を意識しなかつたのであり、内に絶對無の自覺に達しなかつたが故に、この世の諸行無常も感じなかつたのである。たとへば古事記に現れる伊邪那岐命と伊邪那美命と

の黄泉比良坂に於ける御問答は、最も雄辯にそれを語つてある。千人の死者に對して千五百人の生者を望む心は、肉體に罪あることを知らぬは勿論、肉體的生活をつかの間のいのちと考へたものでもない。それは死に對する生の凱歌、闇を避けて光を慕ふ小兒の心である。

かかる思想を現實主義と呼ぶのに何の不思議もないであらう。けれどもいかに現實主義とはいへ、現實の生の根據は何處かに求められなければならない。もとより現實主義に於ける生の根據は、現實の生と原理を異にするものではない。しかし現實の生の根據をなすものは、そのかぎりに於て既に、現實の生とは多少の距離を持つたものでなければならぬ。實はその距離の遠近に應じて現實主義に種々のニュアンスの相違が生じてくるのである。さうして日本的現實主義に於てはその距離は極めて遠い、それは神代である。この故に日本人は現實主義者であるといつても、無窮の過去を回想し、無窮の未來を

翹望する。柿本人麿は近江の荒都を過ぎて悠遠の神代を偲び、山邊赤人は富嶽の秀麗を仰いで神代の清淨を觀じた。眼前の一景觀に於て、觸目の一史跡に於て、直ちに想を神代に馳せる日本的現實主義は、口腹の欲望に満足する所謂現實主義と同日に論ずることはできぬ。日本思想は、現實の生の根據を現實との連續態に於て求める所に現實主義であり、しかもその根據を悠遠の距離を隔てて考へる所に理想主義である。吾々の祖先が、もと日本思想とは原型を異にする佛教やキリスト教を包容し得たのも、この距離の遠大なるに依るのである。

さて現實の生が其處より生れたる生成の根據を現實との連續に於て求める思想は、同じく現實の生が其處に歸りゆく死滅の世界をも現實との連續に於て求めなければならない。さうして現實の生が其處より生れる地盤、その強さを主張するのが上代の文化であり、現實の生が其處に歸りゆく地盤、その弱さを意識するのが中世の文化

ではあるまいか。萬葉はその過渡期である。

人が現實のいのちの滅びゆく世界を想ふとき、しかもその世界がこの現身のいのちと連續してゐるとき、人は情の文化を形成する。うつろひ行く現身のいのちを念はずして情の文化は形成されないと共に、現身のうつろひ行く彼方の世界がこの現身の世界と斷ちきれてゐては、情の文化は形成されない。いかに死後の一身を觀ずるとしても、死後の世界が地上に對する天上であり、此岸に對する彼岸であつて、その間に斷絶の一線が劃されるならば、人の態度は宗教的となつて情的にはならない。宗教は、或は往相といひ、或は還相といつても、ともかくも一應は強き二世界觀に震盪されざる限りは成立しない。情はこの世への執着であるが故に、宗教は情の介在を許さない。佛教の慈悲といひキリスト教の愛といつても、一應は冷嚴なる情の否定を通らなければならぬ。この故に日本人西行といへども、その發心の刹那に於ては、袖

に絶る四歳の童女を振り拂はねばならなかつた。神に對する畏敬の情は、情といふもセンチメントではない。アガペーはエロースと異ると云はれる所以である。これに對し、この世の果敢なさを悲しみ、あの世の常住を念つても、あの世をこの世に連ると考へる日本民族は元來が宗教的民族ではない。そこに於ては、死したるものは祖先となる意味に於て直ちに神となるのであるが、祖先崇拜は感情であつて宗教ではない。佛教の日本化と云はれる現象は、おしつめれば佛教に情の要素を入れたといふことにほかならない。親鸞はその代表者であらう。肉食妻帯は佛教に於ける情の復活である。

ともかくも、現實のいのちの滅びゆく相を見ずしては、しかもその滅びゆく世界がこの世界と續いてゐなくては、人の態度は情的とならないのである。かう考へてくると、吾々の生が其處より生れる生成の根源を見てゐたものが、聽て其處に歸り行く寂滅の故郷を意識したと

き、中世的世界觀「もののあはれ」の理念は成立したのではあるまいか。それは情的なる日本思想の土壤に咲いた花であるが、情的なる日本思想は日本的現實主義の地盤に根ざしてゐるのである。生成の地盤の回想より寂滅

の地盤の意識への轉回に當つて、佛教の影響がいかに強いかは勿論云ふまでもないことであらう。けれどもそれが「もののあはれ」といふ情緒の性質を帯びてくる所

に、吾々は鋭く日本的なるものを看取しなければならぬ。

四月初旬當地に移つて以來、慌しい生活のうちにあつて、想をまとめる暇もなく、僅かにかかる斷想を書き綴るに止つた。伏して春日先生の御宥恕を乞ふ。

昭和十三年四月二十五日夜。廣島の寓居に於て。